

Title	現代アラム語概観(一) : 現代東アラム語
Author(s)	高階, 美行
Citation	大阪外国語大学学報. 71(1-3) p.55-p.85
Issue Date	1986-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81093
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

現代アラム語概観 (一) —— 現代東アラム語

高 階 美 行

A State-of-the-Art Study on Modern Aramaic (I) —— Modern East Aramaic

Yoshiyuki TAKASHINA

Since its rediscovery in the mid-19th century, Modern Aramaic, which had been thought to have died away long before, has been the object of study by many scholars and we now know quite a lot about it in comparison with modern South Arabian and modern Ethiopic that still await to be described. Yet it may safely be said that Modern Aramaic dialectology has not achieved as firm a foundation as Modern Arabic dialectology, owing to the fact that it has never drew scholars' enough attention it can duly claim if its glorious role it played in the history of Middle East is taken into account. The number of its speakers, to be sure, is next to nothing as compared with that of Arabic-speaking population and they have never formed any political or administrative unit, but nonetheless this does not justify neglecting the modern phase of Aramaic that can boast of incomparable range of time — three millennia ! — of continued written records of one and the same language.

After the second World War, descriptions of some new dialects as well as collections of newly studied texts of which we have had only a few have appeared, while some scholars contributed to the dialectological study of Modern Aramaic phonology and morphology, especially of verbal system. But the more we know about these languages, the more we want to grasp the exact relationship of them, synchronically and diachronically, and it is of my opinion that we have at this stage of research sufficient knowledge and materials on the basis of which we can get a better overview of Modern Aramaic as a whole, which will in the course of work help us make clear what has been studied much and what others are still left to be investigated more.

What follows is the result of my work to get together all we know of Modern Aramaic : its history, religion of the speakers, its relation with the dialect, distribution of dialects, history of study and literary works. These will be followed by a grammatical sketch where new interpretations of linguistic phenomena will be offered here and there.

Modern Aramaic is divided here into four groups : (1) Modern East Aramaic, of which Christian dialect is variously termed as Assyrian or Chaldaean and whose Jewish dialect lacks a general name ; (2) Modern Central Aramaic, a group of dialects in Ṭūr 'Abdīn,

called Tūrōyo ; (3) Modern Mandaic, which R. Macuch discovered actually spoken still in 1953 and should be looked upon as a separate and independent branch of Modern Aramaic, not as a mere continued phase of Classical Mandaic ; and finally (4) Modern West Aramaic spoken in the three villages northwest of Damascus.

In this part of the article, Modern East Aramaic is dealt with and the rest of the part for the other three languages will appear separately.

0. 序 論

0.0. はじめに 19世紀前半, 死滅したと思われていたアラム語が生きた姿で発見されて以来, 数多くの報告・研究がなされてきた。にもかかわらず, その全体像, すなわち, 既知の全方言を対象とする現代アラム語方言論は, 未だ十分確立しているとはいいがたい。現時点における話者数の少なさ, 各地に散在すること, その結果どこでも政治的・行政的単位を構成していないことなどのために, 残念ながら, 過去の文化的宗教的役割に比し, 研究者の十分な注意を引くことがなく, それらが持つ大きな方言的差異は認識されず, 時として従来よく知られている後期アラム語の延長としてしか触れられていない。

むしろ, 初期のテオドル・ネルデケによる旺盛な研究以降, 諸方言すべてを念頭においた研究は減少し, 個別方言の調査記述に重点が移ったまま戦後を迎えたのである。こうした成果に加えて, 幾つかの新しい方言記述が行われたり, より精密な調査報告と資料の収集が積み重ねられている現在の研究段階は, 今まで得られた資料と研究分析活動に依拠して, 各方言相互の位置関係や後期アラム語との関係を再検討することを可能にし, かつ今後の研究課題を明らかにすることを求めていると思われる。苛烈な二つの世界大戦による想像だに困難な状況の中で世界各地に分散し母語を失いつつある現状では, この作業は不可欠とも言える。

以下の記述は, こうした認識のもとに, 現代アラム語に所属する各言語の概要をまとめ, 位置付けを試み, 新たな解釈を可能な限り提出することにより, 現研究段階がどこまで到達しているかをまとめようとしたものである。尚, こうした研究の性質上, 引用参照等は本文中に必要最小限しか行われていない。

0.1. 現代アラム語と系統 現代アラム語は, セム語族北西セム語派に属するアラム語の現代語である。前10世紀まで遡る古代アラム語から約三千年間中近東で主要な役割を果たしてきた言語の現代における方言群の総称である。これほど長期間の記録が残る言語として, 言語の史的発展の特異な実例となっている。地域的方言形の定着した後期アラム語(後200年—11/13世紀)は, パレスチナのユダヤ人方言であるガリラヤ・アラム語 Galilean Aramaic(以下 GA), サマリア人のサマリア・アラム語, キリスト教徒のキリスト・パレスチナ・アラム語 Christian Palestinian Aramaic(以下 CPA)などの西アラム語と, 東方キリスト教会の古典シリア語 Classical Syriac(以下 CS), バビロニアのユダヤ人のバビロニア・アラム語 Babylonian Aramaic(以下 BA), グノーシス主義マンダ人の古典マンダ語 Classical Mandaic(以下 CM)などの東アラム語に分かれる。現代アラム語は後

期東西アラム語の発展形である。

0.2. 忘却と発見 主としてキリスト教・ユダヤ教の言語として中近東の主要言語であったアラム語は、7世紀のイスラム出現と共に少数派の言語と化し13世紀には積極的創作活動も停止した。以降、アラム語は死滅したと考えられていたので、米人エリ・スミス Eli Smith とドワイト H.G.O. Dwight が1831年現代東アラム語 Modern East Aramaic (以下 MEA) を話すネストリウス派キリスト教徒に初めて接触した時、著名なセム語学者ルナン E. Renan ですらそれを信じなかった。更に1861年春ジュールズ・フェレット Jules Ferrette によりダマスカス北方のマアルーラ村の現代西アラム語 Modern West Aramaic (以下 MWA) が発見されるなど、東洋学者の関心が高まり調査旅行が行われた。この結果トルコ南東部の現代中部アラム語 Modern Central Aramaic (以下 MCA), 即ちトゥーローヨ語についても存在が伝わり、1869年3月オイゲン・プリム E. Prym とアルベルト・ゾチン A. Socin がダマスカスで調査記録した。以上がすべてと思われていたが、1953年ルドルフ・マツーフ R. Macuch がイランのアハワーズで現代マング語 Modern Mandaic (以下 MM) を話す人々を発見した。尚、メソポタミア北部のユダヤ人におけるアラム語使用については、12世紀のユダヤ人旅行家トゥデラ (スペイン) のベンヤミン Benjamin of Tudela が、クルディスタンのアマディーヤで「タルグームのことば」(＝アラム語)を用いていると報告していたが、長く忘却されていた。

0.3. 後期アラム語との比較 発見以来の多くの研究にも拘わらず、まだ判明しないことが多い。伝承・母音表記の確実な CS とマツーフによる伝統的発音の研究が公刊された CM を除き、信頼可能な後期アラム語資料がないという事実が、現代語との比較を不可能にし、来源問題究明の大きな障碍となっているからである。目下主としてヘブライ大学の研究者がそれに取り組んでいる。モラグ S. Morag が BA, 故クッチャー E. Y. Kutcher とその弟子が GA, ベン・ハイム Z. Ben-Hayyim がサマリア・アラム語, ゴシェン・ゴトシュタイン M. H. Goshen-Gottstein が CPA について信頼性ある写本と伝統発音に基づき研究している。これらが完成し音声形式が確実になるまで現代語比較研究では、不十分な現存のものに依らざるを得ないが、可能な限り彼らの講義や研究に依拠する。

0.4. 現代アラム語の分類 従来相互に方言関係にあるとみなされてきたが、最近の動向に従い相互理解不可能な独立した四言語とその内部方言として分類する。これらの話者はアラム語の他に、場所に応じて周囲の言語(クルド語・トルコ語・アラビア語・ヘブライ語・ペルシア語)のうち2～3言語を併用する。

A. 後期東アラム語の発展形＝広義の現代東アラム語

I. (狭義の) 現代東アラム語 MEA

(1) ウルミア方言 Urmia (以下U) —イラン北方ウルミア湖(現レザイヤ湖)西部の平原にあるウルミアとその北スブルガン Supurgan 及び湖南西のソルドゥズ平原 Solduz (ナカデ等)を中心とする。

(2) 北方言—湖北部のシャープールを中心とするサラマス平原 Salamas, トルコ領ハカリ

Hakkari の北クチャニス Qudshanis (ネストリウス派総主教マル・シンムーン Mar Shimun の居た村), その東ユクセコヴァのガワル平地 Gawar, その西ジロ Cilo 山地一帯

- (3) クルディスタン中央方言—トルコ領ヴァン湖の南からイラク領アマディーヤにかけての山岳地帯。19世紀末まで半独立状態にあり aşḫrat (アラビア語 ‘ašīrat ‘部族’) 地方と呼ばれていたのでアシーラト方言とも言う。アシーサ Ashitha を中心とするティアリ地方上下 Upper / Lower Ṭiari, その東でジロの南西のトフマ峡谷 Tkhuma 及びガワルの東と南東の国境地帯に生まれたティアリからの移住村落

- (4) 南方言—ヴァン湖南西部のチグリシ上流ビュフタン地方 Būhtan, トルコに近いイラクのザホー Zakho, その南のアルコシュ Alqosh とモスル平原の村落

II. 現代中部アラム語 MCA = トゥーローヨー語 Ṭuroyo

トルコ南東部マルディン市を中心とするトゥール・アブディン地方 Ṭūr ‘Abdīn のヤコブ派キリスト教徒の言語

III. 現代マンダ語 MM

イランのフゼスタンにあるアハワーズとホラムシャハルに住むマンダ教徒の言語

B. 後期西アラム語の発展形

IV. 現代西アラム語 MWA

ダマスカスの北, アンチ・レバノン山脈中のマアルーラ Ma‘lula, ジュップ・アディーン Ġubb ‘Adīn, バファ Bah‘a の 3ヶ村の言語

尚, 政治的変動(後述)による移住の結果として, 現代における中近東各国別の分布は, 話者の多少を別とすれば次のとおり。イラク = MEA; イラン = MEA, MM; シリア = MEA, MCA, MWA, MEA ユダヤ人方言; トルコ = MCA, MEA; レバノン = MCA, MEA; イスラエル = MEA ユダヤ人方言; ヨルダン = MCA, MEA (?). このリストでは欧米への移住とこれら諸国における教会の用語としての CS の使用は対象外である。

1.0. 現代東アラム語 (MEA)

以下には狭義の現代東アラム語を概説する。独立項目として扱われる「現代中部アラム語」, 「現代マンダ語」, 「現代西アラム語」は, 別の機会に触れる予定である。

1.1. 言語名 後期アラム語のうち CS は 3 世紀のエデッサ (現トルコ領ウルファ) の方言を基に成立し, 431 年エフェソス公会議で異端とされた東方教会ネストリウス派 (景教) キリスト教徒の言語として文語の地位を得た。このため, イスラムによりクルディスタン山岳地帯に追い込まれた彼らが再発見されて以来, 彼らの言語は新/現代シリア語 New / Modern Syriac とか口語シリア語 Vernacular / Colloquial Syriac とか称される。又ネストリウス派の CS は CS 東方言に属するため, 新東シリア語 New East Syriac と呼ばれる。単に現代/新アラム語 Modern / Neo-Aramaic の名もある。後述の理由で MEA は CS との直接的関係はなく全体として後期東アラム語に接続する

ものであるから「現代東アラム語」が最もその性格を適切に表している。

1.2. 方言の分布と移動 MEA を話すネストリウス派は再発見以来、帝国主義的関心と結びついたキリスト教各派の布教活動の対象となったため、その報告から言語状況がかなり判明した。上掲の MEA は英国国教会より1880年代後半5年間ウルミアに派遣されたマクリーン A.J. Maclean によるものである。しかし第一次大戦前夜の政治状況下で西欧の宣教師と結びつく彼らは、ドイツに協力するトルコやその支配下のクルド人との関係が悪化し、ウルミアに進出(1911)していたロシア軍の撤退と共に約1万人が北上しソ連に入った(第一次脱出, 1914年10月)。残った住民の4分の1はトルコ軍の犠牲となったと言われるが、更に1915年末ロシア軍に守られて山岳地帯の住民5~6万人がウルミアとサラマスに集中した(第2次脱出)。革命によるロシア軍引き上げの後、英国軍の勧めで5~7万人がウルミアを出てバグダードに近いバアクーバ Ba'quba まで南下集結した(1918年7~8月)。第一次大戦後一部はウルミアに帰郷した(1921~2)が、多くはバグダード、テヘラン、ペイルートなど主要都市、及び欧米へと移住していった。更に残った多くは1934年、シリア北部ハーブル川上流域に移住し、今では約50の村落に分かれている。かくして彼らは、イラン・イラク・シリア・トルコを中心としつつも欧米各国に拡散し、離散のユダヤ人と同様知的職業に就いている。この結果19世紀末のマクリーンの方言分類の時点では地域差と言語差が同一であったが、諸方言の混淆が進んでいる現在の方言研究では、故地がどこであるかを明確にすることが不可欠である。

1.3. 話者数 欧米移住後も出版活動をする例外もあるが、大半は母語を失いつつある。又、中近東諸国では人口調査が不完全で言語使用者数は明確でない。少ない資料によれば、1972年のイランでテヘランに15,000、ウルミア周辺に5,500など計22,500人、1970年のソ連に24,294人、シリアのハーブル川上流域に10,000人いる。イラクの約20万人とか、総計30万人という数字は根拠のない推定である。

1.4. 言語名自称・異称 自らシリア人 *surəja* と意識する彼らは、複雑な政治情勢下で古代アッシリアに民族的アイデンティティを求め一般に「アッシリア人」*atoraja* と自称し、西欧が用いるネストリアン Nestorian を用いない。このため MEA はアッシリア語 Assyrian とも呼ばれる。一方16世紀より始まったローマ・カトリックとの合同の動きは1830年1月モスルにカルダヤ教会が成立し完成した。誤用も多いがこうしてネストリウス派の中でローマの権威を認めた合同教会派東シリア人 East Syrian Uniat をカルダヤ人 *kəldəja*, その言語をカルダヤ語 Chaldean と称する(カルダヤ=古代の新バビロニア帝国)。しかし宗教的立場によるカルダヤ語・アッシリア語の区別は MEA としての同一実体を指すものであり、あえて言えば話者の方言的差異が含意されるにすぎない。更にクルディスタン中央方言と南方言がシリア語 Soureth / *sūrat* ~ *sūret* と呼ばれたり、南方言のうちモスル平原の農民方言がフェッリーヒー語 Fellihi (＜アラビア語 *fallāhīn* ‘農民たち’) と呼ばれている。一方ソ連に入りグルジア共和国・アルメニア共和国・アゼルバイジャン共和国やモスクワ等の大都市に住むアッシリア人は、一時アルメニア語形によりアイソル人 Ajsor と呼ばれ言語はアイソル語 Ajsorskij と称された。この言語も書き言葉は MEA の U と実質的に同一である。

1.5. 文字化 英国から派遣されたウォルフ J. Wolff が偶然入手した写本により英国聖書協会が1829年福音書を印刷したり、その数年前にコンスタンチノーブルでイエズス会が一〜二の冊子を印刷したとも言われる。これが MEA 活字印刷の始めであるが、当時誰も正当な評価ができる者はいなかった。1834年米国より派遣されたジャスティン・パーキンス Justin Perkins が、タブリーズで方言を習得し布教にネストリウス派のシリア文字を用いたことから真の文字化が開始した。1840年ウルミアに印刷機が到着し、パーキンスは新約聖書(1846)と旧約聖書(1852)の訳を CS 訳 (ペシッター Peshittā) と並べて出版した。ここに MEA のシリア文字表記の基礎が定着した。パーキンスらの米国宣教団はウルミー方言を中心に文字化したが、1838年ウルミアに到着したフランスのラザロ派 (カトリック) のスペルは、カルダヤ人の多い北方言 (サラマス) に少し影響されている。1885年に来た英国国教会は可能な限り ĆS のスペルに従う語源的方式を採用した。更にロシア正教会もウルミアで他派と同様新聞等を出していた。一次大戦が終わり宣教団の活動が停止すると共に、アッシリア人の手になる出版活動が始まり、スペルの異同が減少していった。イラン革命直前の1978年夏現在、テヘランのアッシリア青年文化協会印刷所刊行の出版物は、U に準拠し影響力の強かった米国式スペルを基として平準化している。こうして現在 U は共通書き言葉の地位を獲得した。

1.6. 写本 1880年代初め中東を調査旅行したザハウ E. Sachau は現代アラム語写本18巻を含む多くの写本を収集した。その中にティアリ (クルディスタン中央方言) とフェッリーヒー語が含まれているが、驚いたことには、アルコシュの司教イスラエル作の詩は1609/10年の日付を持っている。又米人宣教師シェド J. Shedd もウルミアで16世紀か17世紀初頭のものらしいアルコシュ方言の福音書の写本を見たと報告している。ネストリウス派シリア文字によるこれらの作品は少数で表記法に統一が無いものの、口語文字化の試みがかなり以前から知識人の間にあったことと、その時点で既に口語は CS と明瞭な断絶があることを示している。

1.7. 新アルファベット 他方ポロツキー H. Polotsky によればソ連に入ったアッシリア人の間で1928-30年に「ロシアの基本によるアルファベット」が用いられた(大英博物館に一冊)が、1930年には、ポリワノフ E. D. Polivanov やユシュマーノフ N. V. Jušmanov らによりローマ字の「新アルファベット」が考案され、シリア文字と併用されたコーカサスの一部を除きモスクワやレニングラードで教科書・文学の翻訳に用いられた。長く忘却されていたこれらの作品は1959年ドイツの東洋学者フリードリヒ J. Friedrich により、プーシキンやトルストイの訳が紹介された。現在存在が判明しているのは26冊で、図書館に眠っているものを加えても計50冊ばかりと推計されている。しかし使用期間は短く、1939年以降はキリル文字化の動きに従ったのか詳細は不明である。マツーフの伝えるテヘランのアッシリア人の情報ではシリア文字に戻ったとのことであるし、1958年トビリシ (グルジア) 出版のツェレテリ K. Tsereteli による読本ではシリア文字が使われているから、他所のアッシリア人と同様に現在シリア文字を用いていると思われる。

新アルファベットは当時高水準にあったモスクワ言語学を反映してきわめて合理的で、変音調化(後述)の表記に成功している。これに比し、シリア文字文献は多いが、歴史的スペル・閉鎖音の摩

擦音化表記の欠如・母音の正確な音価と変音調化表記不能などのために、真の音声形式を伝えない。従ってポロツキーに従い本稿でも新アルファベットを可能な限り用いるが、変音調化の情報が無い限りシリア文字からの書き換えはできないし、変音調化の条件は多くの例外を伴うのでア・ポストリオリには決定できないという不運な状況にある。故に母語の話者でもない限りシリア文字とその転写による研究は音声的には必然的危険を伴う。

1.8. MEA の位置付け MEA は一般に CS 東方言の発展形であると漠然と考えられ、そうした名称も考えられているが、後に見るように動詞・代名詞の本質的な点で CS と異なり BA や CM と共通することが多い。ある時点でアラム語方言の交替が起こったと考えられない以上、この事実は、文語としての CS とは別に、どこにも書き言葉として採用されなかったがメソポタミアに共通して存在したアラム語を話し言葉として用い続けていたことを示している。更に言えば、本来口語として用いていたメソポタミア土着のアラム語の上に、宗教言語として CS が到来した可能性が高い。この意味で17世紀の写本(及びユダヤ人の15世紀に遡る写本)が既に CS と決定的に異なっていることは、きわめて示唆的である。

1.9. MEA の下位方言 後掲の U の概要に見るとおり、MEA の言語特徴は何よりも複合時制の存在にある。これを共有しつつも、各下位方言は次の特徴を持つ。北方言は t の脱落・ $\bar{u} > u$ $\gamma > u\chi$, クルディスタン中央方言は t と d の存在・ $t > \bar{s} \sim h$, 南方言は t と d の存在又は $t > s$ ・ $d > z$ 及び形態論的に CS に近いことなどである。従って例えば U の *məṭə* ‘村’ (< CS *māṭā* ‘国・生地’ < アッカド語 *mātu*) は各方言で次のように現れる: *mā* (北), *mala* (北のユダヤ人方言), *mā ša* (中央のティアリ), *māṭa* (中央のトフーマ, 南フェッリーヒー), *māsa* (南ザホー)。変音調化は, U・北方言(サラムス)・クルディスタン中央方言トフーマまでは確認できるが, その他はシリア文字表記と初期の変音調化を知らないローマ字転写のテキストのせいで, 不明である。ザホーのユダヤ人方言には存在しないから, 南方言に無いことはほぼ確実であろう。当然ながら MCA・MM・MWA には見られない。

1.10. 言語作品 MEA の中で共通書き言葉としての地位を得た U は, 当初宣教師による, 後にアッシリア人自身による出版活動で, 数多くの作品を持っている。中でもサラムス出身のベジャン P. Bedjan は CS と共に U (カルダヤ人であったためカルダヤ語と表記されている) で多くのキリスト教文学を残した。ポロツキーによれば彼の母語サラムス方言の形式が散見されるとのことであるが, 逆にこの事実は U の文学語としての地位を示すものである。宣教師の教会文献と一般教育用テキストの他には, 言語学者によるローマ字転写の民族学的テキストも少なくない。ソ連での新アルファベットによる作品群(文学翻訳・文法書・読本等)や現代におけるアッシリア青年文化協会(テヘラン)の雑誌・歴史・文学等の出版活動は特筆に価する。詳細はマツーフの労作である文学史(1976)を見られたい。

従って U の死滅は当面考えられないが, 他の方言群は U の普及に伴い存在が危ぶまれている。従来比較の対象として付随的に言及されてきたのみであり, 言語学者によるテキストも非常に少ない。

近年個別方言の記述が少し現われてきたが、早急な調査が望まれる。それなしには MEA 内部の相互関係やアラム語の史的発展も全体的な視野で十分には明らかにできない。特に CS に近いとされる南方言の研究は重要である。

1.11. 研究史 MEA の研究は報告・テキストの出版を除き、米国宣教団のストダード D.T. Stoddard の文法(1856)とセム語泰斗のネルデケ Th. Nöldeke の文法書(1868)に始まる。後者は生の音を一度も聞いたことはないが、書評の形で言語学的評価を加えて現代アラム語全体の研究の方向付けを行った。英国宣教団のマクリーンはUを中心として MEA 全体の方言的差異に言及しつつ文法書(1895)と辞書(1901)を出版した。一方ソ連でも高水準の研究が二人のアッシリア人カラージェフ A.I. Karašev とオシポフ S. V. Osipov によりなされた。前者は読本と辞書をロシア音声記号で著わし、ダニエル・ジョーンズと親交のあった後者は IPA 表記の研究を出版した。ユシュマーノフは正書法の確立に努力すると共にこの言語の概説を書いている。こうした研究はマログロフ Q. I. Marogulov による成人学校用文法書(1935)に結実したが、これは簡潔ながらUの記述文法書の唯一で最高のものである。オラハム A.J. Orahram の辞書(1943)も海外のアッシリア人による秀れた貢献であるが、その使用に際してはポロツキー(1961)の指摘が守られるべきである。

二次大戦後の研究は長く停滞していたが、ソ連のツェレテリが積極的に多数の論文・テキストを発表し短い文法書(1964)を出した。その翻訳も出た(伊訳1970, 英訳1978, 独訳1978—独訳が最も完成している)が、精密表記にすぎること(なぜ新アルファベットによらぬのか)とあまり正確でない歴史的視点が不必要に入っていること、音韻論で方言比較に重点を置きすぎていることなどにより、Uの記述すら成功していない。ポロツキーの研究(1961)は多くの洞察に富み不可欠のものである。

U以外ではザハウによるフェッリーヒー語の文法スケッチ(1895)、ドミニコ派神父レトレ P.J. Rhétoré (1912)とクロトコフ G. Krotkoff (1982)による南方言の文法があるのみだったが、近年ヤコビ H. Jacobi がクルディスタン中央方言(トフォーマ)の文法を追加した(1973)。残念なことに北方言についてはデュヴァル R. Duval のテキスト(1883)があるのみで、まだ文法記述はない。サラ I. Sara の文法(1974)は、南方言に属すると思われるが、複合時制への言及が無いのは偶然であろうか。もし本当に無いなら、その位置付けは大きな問題となる。総じてシリア文字表記による通時的観点に立った文法が多いことは、UをCSと紛らわしくさせアラム語の背景知識なしに接近することを困難にしている。Uの記述文法はこの意味で焦眉の課題である。

1.12. ユダヤ人方言 イスラムの進出により山岳地帯に追いやられたユダヤ人の用いる現代アラム語は、近隣のキリスト教徒の MEA に類似しているが、宗教・文化・共同体相互の交流等の相違により多くの差が存在する。従って全体として広義の現代東アラム語に属するが、別個に扱うのが適切である。ガーベル I. Garbell と自らの母語を研究しているザホー出身のヨナ・ツァバル Y. Šabar などによれば、次のように分類される。

I. イラク側クルディスタン

- 1) 北西部方言 — ザホー, アマディーヤ (クルディスタン中央方言と南方言に近い)
- 2) 南東部方言 — アルビル, キルクーク, マハバドなど

II. ペルシア側アゼルバイジャン

- 3) 北部方言 — ウルミア, サラマス, バシュカレ, ガワル (北方言に近い)
- 4) 南部方言 — ウシュヌイエ, ソルドゥズ (Uに近い)

III. トルコ側クルディスタン

- 5) 西部方言 — ヌサイビン, ジズレ, ディヤルバキル, ウルファ, アレッポなど

上記以外出身のユダヤ人にもアラム語の話者はいるが、全体の話者数とともに未調査で詳細は不明である。これらのユダヤ人も、第一次大戦前後の混乱とクルド人の迫害により多くは故地を離れて移動し、シリア以外からはイスラエル建国にともなって帰還した(1920年代, 1950-2)。従って彼らが(本来の民族語であるとはいえ)ヘブライ語の生活を送っていることや、故地で母語を習得した世代は高齢化していること、更に例外を除いて決して表記されなかったことなどにより、これらの方言の死滅は近い。

ヘブライ語と並び宗教の言語であったアラム語は、ユダヤ人にとりまず第一にタルグーム((旧約)聖書の翻訳)の言葉であったため、これらの方言は一般に *liš(š)anit targum* ‘タルグームの言葉’ と呼ばれるが、1) はヘブライ語で *kurdî* ‘クルディスタンの言葉’ とか 2) は *jabali* (j=[dʒ]) ‘山の言葉’ とも呼ばれる。これらの方言は言語学者の対象となつてはいるが主としてキリスト教徒方言との対比でのみ取り上げられているので、数量ともに多くない。イスラエルのヨセフ・リヴリン J. Rivlin らの研究はヘブライ文字で転写するので、母音の正確な音価がわからない。唯一の文法書とテキストは 3)~4) を扱うガーベル(1965)のもので、秀れた記述的研究である。ポロツキーによる 1) の文法書は完成一步手前であるのに長期間手稿のままである。ツァバルの積極的研究は 1) のものである。ジズレ(グジラ)方言に関する中野暁雄の研究は 5) の音韻論とテキストで、このグループ唯一のものである点で価値が高い。2)・5) は殆ど手つかずの状態ですら急な調査が急務となっている。

だが少数ではあるが、聖書研究に忠実な民族的特質のおかげで、口語の聖書註解がヘブライ文字表記により幾つか残っている。ツァバルによる発音伝承に基づく研究(1976)ではその一つネルワ Nerwa (イラク領ラワンディズの西, 大ザーブ川流域。18世紀までユダヤ人の中心地, 以降中心はザホー)で1647-70年に筆写された写本は、更に15世紀まで遡ることができる。その特徴は、古い性質を残しながらも既に基本的な点で現代語と共通した多くの現象を示していることである。この点キリスト教徒の写本と同じであり、現代アラム語と後期アラム語との間を埋めるものとして「早天の慈雨」の如き存在である。

尚、後述のようにガーベルは、3) 4) が本来の言語 (BA に近い?) を捨てクルド語を経た後に再度この地域に一般的だったアラム語方言に移った結果であると考えている。この驚くべき結論が妥当与否か判断しかねるが、少なくとも 1)~2), 5) の方言群のうち既知のものに関しては、この推

論の根拠である変音調化を持たない(持つものが発見されるかも知れない)ので、この推論は成り立たない。恐らく、紀元前後からのアラム語がそのまま使用され続けていると思われる。

1.13. 未知の方言 ユダヤ人方言の中に未調査のものがあることは述べたが、ヤストローヴO. Jastrowの次の報告(1971)はそれ以外にも特にトルコ領内でまだ未知の方言が残っている可能性を示している。ヴァン湖の南にあるシールト州Siirt ペルヴァリPervaliに近いエキンドュズユ村Ekindüzüで百数十人が話す方言は、複合時制を持たないのでMEAに属さず、t・dが摩擦音化しないなどの理由でMCAにも属さない。従って「現代アラム語の分類」の項のどこに所属するのか不明である。この場所はマクリーンの言うビュフタン地方に近いので、もし彼がこの方言を意図しているならMEA南方言より除き独立させねばならない。いずれにしてもこの奇妙な方言の存在は多くの問題を提示しており、更なる資料が望まれる。

1.14. 辞書 辞書が存在するのはUだけである。

- a. Maclean, A. J. (1901) ; Dictionary of the Dialects of Vernacular Syriac. Oxford, repr. Amsterdam, 1972
- b. Oraham, A. J. (1943) ; Dictionary of the Stabilized and Enriched Assyrian Language and English. Chicago (絶版)
- c. Церетели, К. Г. (1958) ; Хрестоматия Современного Ассирийского Языка со Словарем. Tbilisi (絶版)
- d. Friedrich, J. (1960) ; Zwei russische Novellen in neusyrischer Übersetzung und Lateinschrift (*Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, XXXIII, 4*). Wiesbaden
- e. Garbell, I. (1965) ; The Jewish Neo-Aramaic Dialect of Persian Azerbaijan (*Janua Linguarum, Series Practica III*). The Hague

a～cはシリア文字表記で、aはローマ字による音声表記が不正確で変音調化がわからないが、語源情報が多くUを中心としつつも方言形を併載しているのが特徴。bはアッシリア人によるもので語彙数が一番多いが、スペルは表音的なので語源研究には不向きである。ポロツキー(1961)の指摘のように、しかし、無原則と思われるローマ字転写は変音調化の情報を含むので貴重であるが、常に決定的とは言えないのが残念である。読本cは語彙集を持ち有用だが音声転写に注意が要る。新アルファベットのテキストdに付された語彙集は唯一の信頼できる音声形式を伝えるが、語彙数が少ない。従って意味はテキストに付された語彙も含めてこれらすべてを探す。音声情報は文法知識によるかdに無ければbを参照し、それで判明しないなら断念する。ユダヤ人方言はeの語彙が唯一のもの(方言グループ3～4)。尚、後期アラム語の辞書類やトルコ語・クルド語・アラビア語・ペルシア語の辞書も不可欠である。蛇足ながらThomas Audo (Mosul, 1897)やYa'qob Ewgen Manna (Mosul, 1900)の辞書が最近、前者はDictionary of the Assyrian language (Stockholm, 1979)、後者はChaldean-Arabic dictionary (Beirut, 1975)としてそれぞれ再版されたが、タイトルにもかかわらず実際はCS 東方言の辞書である。

1.15. 主たる研究書 次のリストは、論文・テキスト・言語作品を除いた主としてUの言語研究である。Uを知るには、マログーロフで音韻論を把んだ後ツェレテリの通時的部分を見つづつ両者併用して形態論の概要を知る。ネルデケ(1898)で後期アラム語代表としてCSを学んだ後マクリーンに進むのが良い。マクリーンとネルデケ(1868)は後期アラム語の知識が無ければ利用できない。尚ヘツロンは話者がウルミア出身だが純粋なUでないことに注意。ポロツキーはそのレベルで到達可能な目標としての頂点を示している。

Friedrich, J. (1959) ; Neusyrisches in Lateinschrift aus der Sowjetunion, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, Bd. 109, pp. 50-81

Garbell, I. (1964) ; "Flat" words and syllables in Jewish East New Aramaic of Persian Azerbaijan and the contiguous districts—A problem of multilingualism, in *Studies in Egyptology and Linguistics in honour of H. J. Polotsky* ed. by H. B. Rosén. Jerusalem, pp. 86-103

—— (1965) ; The Jewish Neo-Aramaic dialect of Persian Azerbaijan (*Janua Linguarum, Series Practica III*). The Hague

Hetzron, R. (1969) ; The morphology of the verb in Modern Syriac (Christian colloquial of Urmi), *Journal of the American Oriental Society*, Vol. 89, pp. 112-127

Jacobi, H. (1973) ; Grammatik des thumischen Neuaramäisch (Nordostsyrien) (*Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, XL, 3*). Wiesbaden

Jastrow, O. (1971) ; Ein neuaramäischer Dialekt aus dem Vilayet Siirt (Ostanatolien), *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, Bd. 121, pp. 215-222

Krotkoff, G. (1982) ; A neo-Aramaic dialect of Kurdistan (*American Oriental Series, 64*), New Haven

Macleay, A. J. (1895) ; Grammar of the dialects of vernacular Syriac as spoken by the eastern Syrians of Kurdistan, North-West Persia and the plain of Mosul. Cambridge, repr. Amsterdam, 1971

Macuch, R. (1976) ; Geschichte der spät- und neusyrischen Literatur. Berlin

Marogulov, Q. I. (1935) ; Grammaire néo-syriaque pour écoles d'adultes (dialecte d'Urmia), traduit du néo-syriaque par Olga Kapeliuk, préface de H. J. Polotsky (*Comptes rendus du groupe linguistique d'études chamito-sémitiques, Supplément 5*). Paris [titre original ; Grammatik qə mədrəsi d gurb. Moscou], 1976

Nakano, A. (1973) ; Conversational texts in Eastern Neo-Aramaic (Gzira Dialect), (*Study of languages and cultures of Asia and Africa, A series No. 4*). Tokyo

Nöldeke, Th. (1868) ; Grammatik der neusyrischen Sprache am Urmia-See und in Kurdistan. Leipzig, repr. Hildesheim, 1974

- (1898) ; Kurzgefasste syrische Grammatik. Leipzig, repr. Darmstadt, 1966
- Polotsky, H. J. (1961) ; Studies in Modern Syriac, *Journal of Semitic Studies*, Vol. 6, pp. 1-32
- Rhétoré, P. J. (1912) ; Grammaire de la langue soureth ou chaldéen vulgaire selon le dialecte de la plaine de Mossoul et des pays adjacents. Mossoul (絶版)
- Sachau, E. (1895) ; Skizze des Fellichi-Dialekts von Mosul (*aus den Abhandlungen der königl. preuss. Akademie der Wissenschaften zu Berlin vom Jahre 1895*). Berlin (絶版)
- Stoddard, D. T. (1856) ; Grammar of the Modern Syriac language as spoken in Oroomiah, Persia, and in Koordistan, *Journal of the American Oriental Society*, Vol. 5, pp. 1-180h
- Tsereteli, K. G. (1964) ; The Modern Assyrian language, translated from the Russian (Moscow, 1964) by B. A. Zhebelev. Moscow, 1978
- ; Grammatik der modernen assyrischen Sprache (Neuostaramäisch), übersetzt von Peter Nagel. Leipzig, 1978

本稿で言及する各アラム語の通史について :

高階美行(1985) ; 「アラム語の世界」, 『民族の世界史 8 アフロアジアの民族と文化』, pp. 288-310

2.0. MEAの言語概要

以下に現代東アラム語の代表としてウルミー方言の概要を記述し, 後期東アラム語との関係を考察する。後者は特記せぬ限り, 母音の明瞭なCS東方言の形式である。

2.1. 音 韻 論

2.1.1. 音素目録 新アルファベット表記で示すと次のとおり。

I. 子音 (23) : p f t [t] s c [tʃ] ʃ [ʃ] k x q h ' [ʔ]
b v d z ɟ [dʒ] ʒ [ʒ] j [j] g
m n ; l r

II. 母音 (5) : i e a o u

III. かぶせ音素 (2) : 変音調化土 flat, 強勢

変音調化表記用の母音字 ə・b は後述。有声両唇破裂音 [b] は新アルファベットでBであるが他にならいbと転写する。この正書法では (1) 非音韻的対立に基づく t [tʰ] /t [t] の区別, (2) [uj] の出わり音が表記されぬこと, (3) コブラの形態音韻的变化による -i/b- が実際は [é:] であること, に注意が要る。

2.1.2. 異音としての帯気音 (aspiration) p, t, c, k には帯気異音が存在する ([pʰ], [tʰ], [tʃʰ], [kʰ]) が, それらは音素となりえない。なぜなら (1) p, c における無気/帯気の対立は CS の特定の対立に基づかず, CS との対応は CS k : q = U (k : k') : q であり意味の区別に関与的でないし, (2)

仮にCSの発展形の中に帯気音が現れるとしても、常に－flatを伴うためその二次的調音とみなしうる (nəpil[na : p'il] ‘彼が落ちる’) からである。(3)CSの対立 t/[t̥] に基づく t/[t̥]/[t̥]/[t̥] が表面的に意味の区別に関与的である (torə ‘雄牛’ < tawrā ; tora ‘時間の間隔’ < tawra) ようでも、帯気音は－flatの語彙の中しか現れず、結局それはp, c, kと同様に帯気性は変音調性欠如(－flat)の二次的現象である。以上から新アルファベットは t/t̥ を除き帯気音を表示しないし、音韻的には異音である。次項の非帯気音化の現象を考えれば、帯気音はきわめて有標的である。尚、精密表記に努めるツェレテリの言う咽頭音化(不正確!)は変音調化異音の二次調音として我々の無気音に相当する。

2.1.3. 内部連声における交替 (1) 非帯気音化(de-aspiration) : 前項の帯気音は摩擦音 s/z, ʃ/z, xの直後で、帯気性を失う (biʃtə ‘悪’, prəxtə ‘飛ぶこと’ t≠[t̥])。従って女性語尾 -ta に関して次のことが観察される。+flat では前項により必ず (rdaxta ‘沸騰’), 又－flat でも非帯気音化の条件下(前2例)では、t=[t̥]であり、それ以外においてのみ t=[t] となる : brətə ‘娘’, mdijtə ‘町’。この発音上の区別にもかかわらず正書法で表記しないのは、前項(3)の理由と共に語源的配慮がなされるからである。だから t/t̥ は正書法に反映した唯一の語源と言えよう。例えば、不連続形態素としての語根を考えると、ʃtij([t̥]) ‘飲む’ と ʃəti([t]) ‘彼が飲む’ に対する語根は語源的 $\sqrt{s-t-j}$ で十分である。

(2) 有声音化/無声音化 : 一般に有声音は無声音の前で無声音化し、無声音は有声音の前で有声音化する : məljəxtə (z=[s]) ‘急ぐこと’, masbaʃta (s=[z]) ‘証拠’。

2.1.4. かぶせ音素 A : 変音調化(flatting)・シンハーモニズム(synharmonism)

すべての語彙は変音調化を伴う(+flat)か常音調(－flat=plain)か、どちらかの超分節的対立を持っている。常音調音に対して変音調音は、子音の軟口蓋化/咽頭音化、唇音の円唇化、/r/のふるえ音、帯気異音における非帯気音化(声門閉鎖)により特徴づけられる。この結果/i/は[i̥][u̥], /a/は[ḁ][v̥]となるなど舌の位置は低く後よりになる。この変音調化は各語彙に内在的なもので、その中のすべての子音・母音に具現化する。当然意味の区別も担う。

伝統的シリア文字正書法ではこれを表記するのは不可能であるが、新アルファベットは、大半の語彙が/a/ないし/i/を持つという事実に基づいて、各変音調化異音を a と b, 常音調異音を ə と i で表記することにより、それぞれの語彙の持つ変音調性の有無を示す。最小対立語を数例あげる。

+flat : pala ‘働く人’ gora ‘男’ sbppa ‘指’
 -flat : pələ ‘半分’ gorə ‘灰色’ siptə ‘唇’

この現象は徹底したもので、動詞の不連続形態素もどちらかの素性を持ちいかなる変化形でも不変である。従ってその活用において/a/, /i/が現れなくとも、対立は保たれている。

+flat : dur ‘回れ’ djara 不定詞 $\sqrt{d-j-r}$
 -flat : dur ‘鍵をかけよ’ dvərə 不定詞 $\sqrt{d-v-r}$

また複合語では、語境界が意識されることにより、別々に決定される : xvardiqnə ‘年長者’ < xvar (+flat, ‘白い’) + diqnə (－flat, ‘髭’)。

この現象はネルデケが指摘して(1882)以来、新アルファベットを考案したソ連の言語学者が初めてシンハーモニズム(Trubetzkoy, *Grundzüge*, 1939, p. 251)と認めて、‘硬い’+flat/‘軟らかい’-flatの対立を設定した。だがこの後十分認識されず、新アルファベットのテキストを扱うフリードリヒは、「暗い/明るい/中央」に三分しトルコ語の母音調和に比定した。ツェレテリも母音調和と考えて三分する。後者は変音調化の二次的調音を精密表記するので、煩雑な上にかぶせ音素としての本質を隠してしまう。ヘツロンR. Hetzron の研究(1969)も含めた術語対照表を示す。

	Morogulov (1935)	Friedrich (1959)	Polotsky (1961)	Tsereteli (1964)	Garbell (1964)	Hetzron (1969)
+flat	hard	hell/Mitte	back	hard/medium	flat	labial
-flat	soft	dunkel/Mitte	front	soft	plain	palatal

シンハーモニズムの通時的起源について、幾つかのアラビア語方言における強調音化emphatisationの一般化(J. Rosenhouse, 1984, p. 60)のように、アラム語内部の発展なのか、隣接言語の影響なのかは決定しがたい。しかし、ユダヤ人方言を研究したガーベル(1964)によれば、不可分の要素としてのヘブライ語語彙は変音調化するに際してアラム語の語彙とは異なった条件を持っている。つまり、ヘブライ語の変音調化は、現在の方言を採用する前の彼らの言語と推定されるクルド語において既に受けていたことを示唆している。従って現在の方言を話すようになって後に、その当時の音韻的条件下に、クルド語の影響を受け変音調化が一般化したと推量される。この考えは同時に次のことを意味する：(1)ユダヤ人現代アラム語方言は彼らのBAの発展継続形でなく、クルド語を経て二次的にキリスト教徒の方言を採用したということ(ネルデケ, *ZDMG*, 37, 1883, p. 602), (2)彼らのアラム語採用時、アラム語にはまだ今日のような変音調化は存在しなかったということ、及び(3)ユダヤ人方言とキリスト教徒方言の変音調化の条件がよく似ていることを考慮すれば、Uを含む後者もクルド語の影響下にシンハーモニズムが成立したと推定されること、などである。

他方アラム語のどんな音声形式が変音調化を受けるに至ったのかについては、ユダヤ人方言以外、未解明である。しかしCSにおける(1)咽頭音 [q̤] と咽頭化子音 t̤[t̤], š[s̤] の存在(ajna ‘目’ < ‘aynā; baṭṭla ‘空の’ < baṭṭilā; sluta ‘祈り’ < šēlūtā), (2)両唇音m, b, p軟口蓋音k, g, x, ġ([ɣ])ふるえ音rのうち2個以上が存在すること(šupra ‘美’ < šufrā; ramta ‘丘’ < rām(ē)tā; paxra ‘体’ < pagrā)などは、例外があるものの、共通した条件である。ここで面白いのは ṭupra ‘爪’ < ṭefrā と ṭuprā ‘尾’ < Arab. dubr である。前者からは本来 ṭipra が期待されるが、変音調化に伴い舌が後よりになり(ṭupra)後者と衝突することになった。そのため、元々変音調化の条件を持つものの借用語である後者が常音調となり、結果的に無気音 ṭ が-flatと共起することになった。

2.1.5. B：強勢

強勢は一般に(1)語末より第2音節にある。それが開音節(CV, CCV)なら長母音となる。従っ

て母音の長さは強勢により二次的に決まる：kəlémə[á:] ‘キャベツ’。/o/, /e/はいつもこの条件下にあり長い：méšə ‘森’。但し閉音節(CVC, CCVC, CVCC)に長母音が存在(ʔálta ‘遊び’)したり，/o/, /e/が閉音節に存在(tórba ‘袋’)することも，借用と形態音韻的变化の結果として少数見られる。また(2)人称代名詞接尾形3人称複数 -e と副詞語尾 -it は語末でも強勢を持つ：nəš-é ‘彼らの男(たち)’，parsupa-ít ‘個人的に’。更に(3)次のものは常に第1音節に強勢を持つ。呼びかけ語：málpənə ‘先生!’ ↔ məlpənə ‘先生’：「彼ら～人」の意味の数詞：árpunte ‘彼ら4人’；曜日名：xóšibə ‘日曜日’；qéməjə ‘最初に’，bózzuni ‘去年’，həmməšə ‘いつも’など。

尚，動詞の活用形(後述)も原則として語末より第2音節にあるが，次の事実が観察される。(1)活用語尾・時相表示詞・代名詞目的語は活用形の一部とみなされる：ki-šəql-ít-lun (未完了相)‘君はそれらを取る’，šqijl-etún-lij (完了相)‘私は君たちを取った’。(2)間接活用では，強勢のないコプラcopulaを除いた部分の末尾より第2音節にある：šqijl-óxun ijvin (結果相)‘私は君達を取ってしまった’，bidmóxili < *bi-dmóxə ijli (進行相)‘彼は眠っている’，biktəvivinvə < *bi-ktəvə ijvin-və (同)‘私は書いていた’。(3)複合時制では助動詞と，不定詞(習慣様態)・受動分詞(結果様態)と別々に語末から第2音節にある：ki-həvívə bizmərə (習慣様態)‘彼はいつも歌っていた’。(4)命令形では常に第1音節にある：təpxunnun < *təpix-un-lun ‘それらを注げ’。

2.1.6. 後期東アラム語からの音韻変化

A：音素目録の比較 CS 東方言の子音(22)は次のとおり。

p	t	s	š[f]	k	q	x	h	[ʔ]
b	d	z		g				[ʕ]
ʔ[t]	š[s]						m	n ; l r ; w y

つまりUでは，咽頭(化)音‘ʔ, šが消失しw > vとなるとともに，f c[tʃ] ʕ[dʒ] z[ʒ]が加わった。新音素4個は借用語中に現れるが，c ʕの少数はアラム語の音声変化の結果である：camha ‘盲目の’ < CS kamhā, $\sqrt{m-c-x}$ ‘見つける’ < CS $\sqrt{m-š-k-x}$, ciriji/tišriji ‘秋’ < CS tešrī ‘10・11月’，cuja ‘なめらかな’ < CS šē‘ā‘āyā ; muçə ‘若い雄牛’ < CS mušxā, ʕvəçə ‘動くこと’ < BA $\sqrt{z-w-z}$ 。

B：CS との対応関係 以下の場合を除き11子音は安定している(但し w > v)。

(1) b g d k p tの母音後の摩擦音化異音は次の如く対応する。

CS	b[v]	g[ɣ]	d[ð]	k[x]	p[f]	t[θ]
U	v	g	d	x	p	t

つまり他に存在する摩擦音 v(< *w)・x(=CS 西方言 h[h])の影響で残った v=b・x=kを除き，一般に閉鎖音となる。これは直前の母音の有無に関係ないので，後期アラム語の摩擦音化規則は失われた。但しこの規則の機能していた頃の変化の結果として少数の例外がある：aḅ > aw > o (gora ‘男’ < gabrā, ʔota ‘善’ < ʔāḅ(ē)tā) ; ḡ > φ(šədə ‘アーモンド’ < šegdā, narra ‘手斧’ < nār(ē)gā, cf. paxra ‘体’ < paḡrā) ; d > φ(xə ‘1’ < xad, qəməjə ‘最初の’ < qadmāyā, nətə ‘耳’ < ʕdnātā(複), cf.

jələ ‘男の子’ <yaldā); aḫ> o~u (bnoṣ-ən ‘我々だけで’ <bē-naḫš-an, ruṣa ‘肩’ <raḫšā); uḫ> u (ṭusa ‘型’ <ṭuṣā); t> ʔ (bar ‘～の後で’ <bātar, ʔla ‘3’ <ʔelātā, cf. iltix ‘下に’ <lētaxt)。

(2) 咽頭(化)音は ‘ が消失し s ʔ が s t に合一するが、しばしば変音調化して影響を残す: slbjva ‘十字架’ <šēlibā。その際 ‘ は前の有声音を無声化し (arpa ‘4’ < ‘arbē‘ā, ʔata ‘汗’ < dū‘tā) たり、直前の子音を重子音とすることがある: marra ‘病気’ <mar‘ā, sbppa ‘指’ < šeb‘ā。

(3) 声門音 ‘ は消失するが、動詞の不連続形態素を構成する音素として / ‘ / を設定する必要がある: asbr = \sqrt{f} -s-r ‘結びつける’ の未完了相語幹, š‘ələ = \sqrt{s} -l ‘尋ねる’ の不定詞。但し正書法上は語中のみ表記される。語頭ではしばしば ‘ > j: jurxa ‘長さ’ < *‘ūr(ē)kā, jissura ‘結ぶもの’ < ‘assūrā。h は語頭で保存される(例外: 代名詞類 av ‘彼’ < haw ‘あれ’) が、語中で時々脱落する: dəvə ‘金’ < dah (ā)ḫā, nərə ‘川’ < nahrā。こうした変化の結果、音節全体が脱落することもある: dana ‘時’ < ‘eddānā, šra ‘ランプ’ < šērāgā。(cf. CS ‘urkā)

(4) 母音の長さは強勢の二次的現象であるから、長短の区別は消失した。ē・ō の舌の位置が上昇したため (ē> i, ō> u), ī・ū は更に上昇し摩擦音の出わたりを伴う: ī> ij, ū> uj。ay・aw は長母音化した (ē・ō) ため、表記されないが /e/・/o/ は一般に強勢を持ち長い(「強勢」の項)。従って CS 東方言と比較すれば次のとおり。幾つかの例を挙げる。ē> i: kipə ‘石’ < kēpā, ō> u: brunə ‘息子’ < bērōnā, ay> e: xelə ‘力’ < xaylā, aw> o: poxə ‘風’ < pawxā, ī> ij: šəpijra ‘美しい’ < šappirā, ū> uj: jaqujra ‘重い’ < yaqqūrā。新アルファベットは uj の出わたり音を表記しない欠点を持つことに注意が必要である。その他の例は上掲(1)を見よ。

CS \ U	a	i	e	u	o	ij	uj
長母音	ā	ē		ō		ī	ū
短母音	a	i/e		u/o			
二重母音等			ay	aḫ/uḫ	aw/aḫ/aḫ		

後期東アラム語との母音対応表

2.2. 代名詞

2.2.1. 人称代名詞独立形 MEAの性格を象徴的に示すかのように、CSと単純に対応するのは一形式のみ(ət)である。以下 m=男性, f=女性; sg=単数, pl=複数。

	sg	pl
3	av (m) əj (f)	ənij
2	ət	əxtun
1	ənə	əxnən

ウルミー方言(U)

	sg		pl	
	m	f	m	f
3	hū	hī	hennōn	hennēn
2	‘att	‘att(y)	‘attōn	‘attēn
1	‘enā		(x)nan	

古典シリア語東方言(CS)

(1) 3人称：CSの形式は消失し、新形式は遠指示代名詞(後掲)に遡る。指示詞aw~o, ay~e に対して人称代名詞 āw, āy を用いる下位方言(トフォーマ)が存在するから、Uはhaw (<*hā-hū), hāy (<*hā-hī) にセム語の指示詞構成要素 hā を再度接頭させたと判断される：hā+haw > hāw > av, hā-hāy > hāy > əj。ゆえにネルデケのようにhaw, hāy より o と av, e と əj を導くのは説得的でない。ənij も指示詞(hānēn)に由来すると考えられる。3人称が指示詞に交替されるのはMMにも共通する。かくして成立した3人称代名詞は、ところが、指示詞としても再度使われることがあることに注意。

(2) 2人称：複数əxtunは'attōn > *atunの段階で1人称複数əxnənに対する類推から、xが挿入された。これは全下位方言に共通する。

(3) 1人称：ənəは*anāに遡るが、これは母音の異化が起こったCS('enā)を除く他の全アラム語の形式である。複数əxnənはアラム語祖形*ānaḥnāのḥ(> x)を持つ点で特異である。後期東アラム語(BA 'ānan, CM anin, CS nan)がxを持たないのに比し、UはCSの正書法にのみ残る(x)nanのxを保持するからである：*xnan > əxnən。こうした以上の事実は、Uの祖形をCSに求められないことを強く示唆している。

2.2.2. 人称代名詞接尾形(A・A') 一般に人称代名詞前接形 enclitic pers. pron. と称される。述語として絶対位相(後述)にある分詞・形容詞に後置され主語を示す人称代名詞独立形が、形態音韻的变化を起こした結果生まれた：CS šappīr+'enā > šappīr-nā '私は美しい'。後期西アラム語では前置されるので、MWAでは異なった結果を生んだ(現代西アラム語を見よ)。特に分詞との結合は現代アラム語で新しいアスペクト表現形式となったので、その活用語尾とみなされる(Uでは未完了相主語、完了相目的語を示す)。

3人称は代名詞によらず分詞の性数変化により示す：m. pātex 'opening' > pətx- ϕ , f. pātxā > pətx-ə, pl. m. pātxīn > pl. m/f pətx-ij。これらにより男性形はpātex+'att > pətx-it(2人称) 'you open', pātex+*'anā > pətx-in(1人称), 女性形はpātxā+'att > pətx-ət, pətx-ən。複数形2人称 pātxīn+'attōn > pətx-itun。これらは既にCSで確認できるが1人称複数では明白にpətx-əx = *pātxī+*'axnan であるから、CS pātxīn+nanに遡らない。ゆえに構成原理と機能は同じでも、音声形式は直ちにCSに由来するとは限らない。

	m	f	pl
3	ϕ	ə	ij/e
2	it	ət	itun/etun
1	in	ən	əx

Uの人称代名詞接尾形A・A'

上例は未完了相であるが、完了相は受動分詞 ptix 'opened' より ptix-lij 'it is opened by me > I have opened(it)' として成立した。ゆえに完了相に接中される前接形は目的語を示す：ptix-ət-lij

‘you are opened by me > I have opened you’. しかしUの完了相では、おそらく接尾形B(後述)により目的語を示す結果相・進行相からの類推により、3人称複数 *ij* が接尾形Bの *e* (常に強勢を持つ) と交替した。更に2人称複数も *itun* > *etun*。最後のケースはストグードと彼に依るネルデケ、マクリーンも触れていない。

本稿では、人称代名詞前接形を接尾形A, 3・2人称のこの変異形を含むものを接尾形A'とする。

2.2.3 人称代名詞接尾形(B) これは名詞・前置詞に接尾されて構成位相(後述)を形成し、前者で所有格を後者で前置詞の目的語を示す、人称代名詞の形式である。本稿では、これを特に接尾形Bとする。アラム語は一般に、構成位相が子音語尾となるもの(*m. sg.*, *f. sg/pl*)に接尾される形式と、それが *-ay* となる *m. pl.* に接尾される形式とを区別する。Uでは、徐々に後者が前者にも接尾されるようになっていたBAや、両者が完全に混同されるCMの傾向が更に進み、名詞の単・複に関係なく同一形式が用いられる。よって、複数語尾 *-i* をとる名詞は接尾形Bを取れば、数の区別が中和する: *nəṣ-u* ‘his man/men’ (*nəṣə* ‘man’, *nəṣi* ‘men’)。重要ではあるがこの事実を除けば、表面的に類似する一つ(*l. pl.ən*)以外にCS・BA・CMと共通するものは無い。それゆえこれらを説明するのは至難であり、ネルデケの説明も生彩を欠く。

	m	f	pl
3	u	o	e
2	ux	əx	oxun
1	ij		ən/enij

Uの接尾形B

CSの接尾形

		sg.		pl.	
		m	f	m	f
単 数 名 詞	3	eh	āh	hōn	hēn
	2	āk	ek(y)	kōn	kēn
	1	ϕ (y)		an	
複 数 名 詞	3	aw(hy)	ēh	ayhōn	ayhēn
	2	ayk	ayk(y)	aykōn	aykēn
	1	ay		ayn	

(1) 3人称 *sg.* *u/o* は当初性の区別すら認識されず説明困難だった。ポロツキーの考え、即ち、*e* (< *eh*)・*a* (< *āh*)に *w*(来源不詳)を加えるユダヤ人下位方言形(2)南東部方言)に基づき *ew* > *u*, *aw* > *o* の変化によるとするのが、*w*の説明に窮するが目下のところ一番妥当である。残りはすべて複数名詞に接尾される形式に由来する(この点単数名詞に接尾される形式を基本とするMMと異なる)。その際複数名詞構成位相の *-ay* は *ē*(開音節)/*a*(閉音節)となる。指示詞の女性形一般化と同様に3人称 *pl.*は *áyhēn* > *áyhin* > *áyn* > *ēn* > *é*(常に強勢を持つ)。

(2) 2人称 *m.f.* は音声的に同一であった。ゆえに *ayk* > *ak* > *əx*(*f.*)。 *m.ux* は、ネルデケのシェワーによる説明(**aykā* > *ay-ūkā* > *aux* > *ux*)が失敗であり代案がない以上、意味区別による音声異化と考えるより仕方ない。ちなみにMEAの全下位方言にこの区別が存在するので確実な原因を持ち、相当以前に発生した変化である。複数形は *áykōn* > *ēkōn* > *ókōn* > *óxun*。 *ēxōn* を残す下

位方言(ティアリ)もある。

(3) 1人称 sg. は CS ϕ , CM ϕ , BA ϕ -ī を考えれば, U ij は単数名詞につく古い*ī に由来するのではなく, 複数名詞の ay (> ē > ī > ij) と考える方が体系的整合性がある。pl.ən も同じ理由で ayn からの変化であろう。ポロツキーによれば, もう一つの形式 enij は家族・共同体内部の構成員に言及する ‘exclusive’ な意味であるという: mət-enij ‘我らが村’。これに対しては西アラム語 GA ēnan に平行する *aynan > ēnan > ēnin > ēnī > enij を意外にも想定せざるを得ない。ちなみに MCA には ayna が存在する。

尚, 動詞の非定型を用いる結果相・進行相は, 当然のことながら enij 以外の接尾形 B により目的語を示す(後述)。

2.2.4. 人称代名詞接尾形(C) 前置詞 l- ‘to, for’ のみは 3 人称に関して, 単数名詞に接尾する形式を保存する: eh > i, āh > ə, hōn > un。前置詞 l- とこの接尾形の結合は未完了相・命令法の目的語, 完了相の活用語尾にのみ用いられるので接尾形 C とする。

	m	f	pl
3	li	lə	lun
2	lux	ləx	loxun
1	lij		lən

U の接尾形 C

3 人称の i, ə, un はその他にも痕跡的に残っている: kull+i/ə ‘彼/彼女全体’, pəlg-i ‘その半分 > ~ の半分’。またストグードが告白するように, 宣教師の初期出版物は u・o (接尾形 B) への無理解から i・ə (C) を用いているが, これは U においては架空の形式である。尚, 代名詞と結合した場合, l- の用法は接尾形 C として限定されているが, 動詞活用形以外の場合, 異形態 il-+接尾形 B が用いられる。接尾形 C への類似から, 3. sg. には, il-i/ə (C) の方が il-u/o (B) よりも頻度が高い。又, 3. pl. に lun (C) でなく le (B) を用いる二つの例外がある: lkis l-e ‘to/at them’, xəs l-e (xəs, xəs lə の変異体) ‘彼らにとってはとんでもない’。

2.2.5. 独立所有代名詞 後期アラム語は公用アラム語 Official Aramaic (前700-前300/200) の dīl+接尾形 (dī l-i > dīl-i ‘which is to me > my, mine’) か, 新しい dīd+接尾形 (dē yad-i ‘of my hand’ > dīd-i ‘my, mine’) の一方を主として独立所有代名詞として用いた: CS, CM, CPA, サマリア・アラム語は dīl-; BA, GA は dīd-。現代アラム語はすべて dīd- の発展形を用いる点で共通している: U dīd- > dij-。dij+接尾形 B を用いれば, 接尾形 B のみによる場合の曖昧さを除去できる: nəṣə dij-u ‘his man’, nəṣi dij-u ‘his men’。

2.2.6. コブラ ‘A は B である’ の文で be 動詞の役割をするコブラは後期アラム語で, <a> ϕ (西アラム語に多い), A B 間に独立人称代名詞(特に 3 人称)を入れる, <c> B の後に代名詞前接形

を置く(東アラム語), <d> 'it 'there is' + 人称代名詞, のいずれかにより表現された。'it につく人称代名詞は, 西アラム語では前接形と接尾形の間で揺れているが, 東アラム語では接尾形に定着した。U はこれらすべてを失い, 'it を中核とする複雑な構成法で新パラダイムを完成した。

	m	f	pl
3	ijli	ijlə	ijnə
2	ijvit	ijvət	ijtun
1	ijvin	ijvən	ijvəx

U のコブラ

A : 形態音韻的变化 述語は常に先行するが, その語末が子音の時コブラは -flat の独立表記。語末が母音の時, 形態音韻変化を起こし述語に接尾されその変音調性に同化する。その母音が -ə/a 以外の時 ij- は脱落: əxunoli < *əxun-o ijli '彼は彼女の兄である'。-ə/a の時, -ə/a + ij- > -i/b- : qajrbli '彼は寒い'。この -i/b- は強勢を持ち音声的には [e:] である。代名詞接尾形 B 3 人称 *pl. é* と正書法上の区別をするためであるが, 新アルファベットの欠陥の一つである。過去形は時相表示詞 *və* (後述) を接尾させる: ijvit-*və* (2. sg. *m.*)。但し 3 人称は -li, -lə, -nə を脱落させるので性・数は中和する: ijvə。

B : 通時的検討 (1) 3 人称 *sg.* は 'it + 倫理与格 *dativus ethicus* (接尾形 C 3, *sg.* 'to him/her') で示す: ij-li 'he is' < 'it l-eh 'is to him'。CS で 'it や $\sqrt{h-w-y}$ 'to be' と共起する倫理与格は支配的ではなかったが, これが定着したと考えられる。しかしなぜ 3, *sg.* のみか。全人称に l- の現れる方言 (ユダヤ人方言 3, 4) もあるが, その 2・1 人称は接尾形 A であり接尾形 B でないから二次的に 3 人称の l- が一般化したと言える。又 BA, CM で 'it の述語が l- を取ることもあるが, 動詞 + 目的語と意識して目的語的に表現したものだから, 異なる現象である。更に所有表示の it-li 'he has' (< *'it l-eh) を考慮すれば, CS の同一形式がコブラ ijli と所有表示 it-li の二形式を生んだことになる。3 人称代名詞 *av/əj* と指示詞 *o/e* の場合と同様に説明が場当たりのになりかねない。

(2) 2. 1. *sg. m.* と 1. *pl.* は 'it + *hāwē* ($\sqrt{h-w-y}$ の能動分詞) + 接尾形 A : ijvit < 'i(t) + (hā)wē + att.。しかし「2.2.2.接尾形 A」の項で指摘したように, 分詞との結合の仕方は CS の形式に遡らない。その上, 2・1, *sg. f.* ijvət, ijvən には *həvət, *həvən を想定しなければならないが, U は別に動詞 ('to be, exist') として同じ人称・数・性に対して *hojət* (< *hāwyā* + 'att(y)'), *hojən* を持つ。ゆえに *həvət 等は対応する男性形 *həvit* 等からの二次的形成である。他方 CS は 'it の時制表示に $\sqrt{h-w-y}$ の完了形・未完形を並置して示したが, その能動分詞 *hāwē* を使用した例はどの後期アラム語にも知られていない (MWA のコブラ *ōb* に *hāwē* を設定する必要があるのは現代語の共通点として面白い)。この意味でも ij- = 'it には慎重さが必要である。

(3) 3・2, *pl.* は 'it + 代名詞独立形。下位方言 (トフォーマ) には 3, *pl.* に *sg.* と同じ -l- を含む *ile~ilun* を持つものもあるが, どこにも -v- はないので *hāwē* は必要でない。よって *ijnə* < *ijne* < **inēn* < 'it + 'ennēn (3. *pl. f.*)。代名詞に *f.* を想定するのは代名詞独立形・指示詞にも共通する。但し, この想定

はトフーマの *īnī* (マクリーン) に依っているが、ヤコビは *’ina* を示すので、マクリーンが誤りなら成立しない。2. *pl. ijtun* < *’it+’attōn* は自明である。しかしユダヤ人方言写本(前述)にある *īwētūn* のように *hāwē* を持つ方言もある。

かくしてきわめて複雑なコプラは、後期アラム語の持つ様々な可能性を利用したとは言えても CS そのものには遡らない。方言間のばらつきに見られるように、おそらく、未完了相(能動分詞+接尾形 A) 成立後に各方言で独自に生まれた新形式で、他のどの現代アラム語にも例をみない。また *ij-* の由来も断定的に比定できない。

2.2.7. 指示代名詞

	m.	f.	pl.
'this'	əhə		ənni~ən
	avva	əjjə	
'that'	o	e	ənij~ən
	(av)	(əj)	

Uの指示代名詞

	sg		pl	
	m	f	m	f
'this'	hānā	hādē	hālēn	
'that'	haw	hāy	hānōn	hānēn

CSの指示代名詞

指示代名詞が形容詞的に用いられる時、名詞に先行する。又前置詞を伴う時指示詞の前に関係詞 *d* が挿入される：*qə d-o nəṣə* ‘その人に’。

指示詞は3人称代名詞独立形と共に語頭の *h-* を脱落させる。(1) 単数形：*əhə* は **hādā* から *d* の脱落により生まれた。即ち BA *hādā*, CM *haza* に遡るのであり CS *hādē* ではない：cf. MM *ahā~hā~ā*。o/e はUの音韻変化法則により *haw* (**hā+hū* ‘彼’) と *hāy* (**hā+hī* ‘彼女’) より生じた。残りの *avva/əjjə* は、*əhə* の指示性を強めるため3人称代名詞 *av* (< *hā+haw*) と *əj* (< *hā+hāy*) に再度指示要素 *hā* を加えたもの：*avva* < *av+hā*。これらがきわめて新しいことは、類例のない *hā* の後置によっても判明する。よって *avva/əjjə* は発生的にみて、指示性が薄れるたびに3回も *hā* を加えたことになり興味深い。他方、指示詞 o/e と3人称代名詞 *av/əj* の区別が成立したのに、再度後者が時折前者の領域に侵入することは、セム語における曖昧な両者の区分が基本的に続いていることを示している：*əj urxə(f)* ‘その道’。

(2) 複数形：*ənni* と *ənij* はシリア文字正書法で類似しているため混同しやすいが区別すべきである。しかしアッシリア人自身も短形 *ən* の存在が示すように時折混乱する。*ənij* は人称代名詞独立形 3. *pl.* と同形式で *hānēn* に由来する (BA *hānē*)。 *ənni* は対応する CM *hanīa* [*hanni:*], MM *ahni~hannī* に見るように、*hānēn* から遠近混同の傾向により生じたことは明白である。すると *hānēn* より *ənij* と *ənni* の二形式が派生したことになる。遠指示詞は3人称代名詞によるというセム語の原則により、代名詞としても用いられる *ənij* との区別の必要性に帰因するのであろう。下位方言における混同と区別の努力がこのことを裏付けている。後期アラム語の女性形が一般化したこと、音

声形式の類似において MM との一致は注目に値する。

2.2.8. 疑問詞・関係詞 Uの新しい疑問詞のリストは次のとおり。その半分が語尾 *-ij* を持つが類推による一般化であろう。おそらく CS で *man* ‘誰’ に接尾されるコブラ *hī* ‘彼女’ (代名詞起源に *f* が多い), *man* + *hī* > *manī* が出発点と推定される。又はコブラの要素 *ij-* と関係があるかも知れない。いずれにしても二次的に広まった語尾であることは、*-i* を異形態として持つ下位方言 (トフーマ) の存在がそれを示唆している。(1) *mud* < **mawd* < *mā* ‘何’ + *hū* ‘彼(コブラ)’ + *d* (関係詞) : *mud(ij)* *xzilux* ‘what is (the thing) that you have seen > what have you seen?’. アラビア語の *mā-dā* ‘何’/ *man-dā* ‘誰’の *dā* の機能を比較せよ。*mū* と CS *mūn* (< *mān*(ā) < **mā* + *dēnā* ‘これ’) は関係ない。(2) *enij* は CS ‘aynā ‘どれ(*m.*)’ > *ēnā* に類推が作用。 *imne* = ‘ay (セム語疑問詞要素) + *min* ‘from’ + *e* ‘them’ > which among them? に由来する。既に CM (BA も ?) の段階で平行例がある。(3) *dəxij* は *a(y)k* ‘～のような’ + ‘ay’ > *axē* > *axī* > *əxij* ‘何の如く’ に由来することは確実である。*d-* は CS によく見られる副詞表現を作る関係詞 (ネルデケ, 1898, § § 209, 355) である。CS ‘aykan(ā) ‘いかに’ では *ə* と *x* の共存・*-ij* の説明が不可能である。*əx* ‘～のような’ に対する下位方言形 *dāx* (マクリーンによる) は、この想定を裏付けている。(4) *ekə* < CS ‘aykā, *kmə* < CS *kēmā*. *ijmən* の *-n* は不明, cf. CS ‘emmat(y) ‘いつ’。(5) 関係詞 *d* は後期アラム語と同様に、名詞と名詞、名詞と句・節、節と節の様々な文法関係を示す。

何	誰	どれ	いかに	どこ	いつ	どれだけ	なぜ	Uの疑問詞
<i>mudij</i> <i>mud</i> ~ <i>mu</i> (<i>mə</i>)	<i>mənij</i> <i>mən</i>	<i>enij</i> <i>imne</i>	<i>dəxij</i>	<i>ekə</i>	<i>ijmən</i>	<i>kmə</i>	<i>qə</i> + 何	

2.3. 名詞・形容詞

2.3.1. 名詞 A : 後期アラム語の名詞語形変化 アラム語の名詞 (形容詞を含む) は古代アラム語の時代より性・数・位相により変化した。絶対位相 (absolute state, 以下 *abs.st.*) は名詞の不定を、限定位相 (determinate/emphatic state, 以下 *det.st.*) は名詞の限定を示す。構成位相 (construct state, 以下 *cst.st.*) とは、属格関係「A of B」で属格として後置される B (nomen rectum, 無変化 *abs./det.st.*) により限定される、前の名詞 A (nomen regens) がとる形である。簡略化すれば後期アラム語の語尾変化は次のとおり。

	sg.			pl.		
	abs.	cst.	det.	abs.	cst.	det.
m	∅	∅	ā	īn	① ay ② ē ③ ē	① ē ② ē ③ ayyā
f	ā	aṭ	tā~ētā	ān	āt	ātā

後期アラム語名詞語尾変化

①はCS, ②はBA, ③後期西アラム語。CM は[i:]で②に同じ。既に後期東アラム語の段階で定・不定の区別は薄れ、*abs. st.* は一般に*det. st.* により交替され形容詞・分詞の述語の形式('it の場合を除く)にすぎなかった。又、3種類の属格構造(1) rīš (*cst. 頭*) malkā (*det. 王*) '王の頭'(2) rīšā (*det.*) d (関係詞)-malkā (3) rīš-eh (彼の頭)d-malkā のうち、セム語共通の(1)は、公用アラム語時代に始まった(2)(3)に駆逐されつつあった。その結果*cst. st.* の用法は比較的少数となった。

2.3.2. B: Uの名詞語形変化 *det. st.* が一般化し、位相の区別は失われた。複数での性の区別も無い。その結果*m. -ə*, *f. -tə*, *pl. -i/-əti*という簡素なものとなった。複数では単数の男性名詞が*-i/-əni*, 単数女性名詞が*-(ə)jəti/-əvəti*をとる。尚Uでは複数語尾*-əti*の*-t*がぞんざいな発音で脱落することがあるので注意が必要である。*det. st.*の一般化の結果、それは名詞の限定性を表さない。ゆえに数詞xə '一'(性の区別なし、<xad)が不定を、指示詞o, e, ən~ənijが限定を表すため、名詞に前置されて用いられることがある。又、格が存在しないので文中の統語的機能は前置詞により示される。すなわち、属格には関係詞d (前述の属格構造(2)), 与・対格にはl-又はqə 'to, for'が使用される。qəはMMに同一形式で現れる: qə<qam<qēdām '～の前へ'。

2.3.3. C: 通時的考察 *abs. st.*の痕跡は、十の倍数となる数詞語尾-ij (isrij '20'<'esrīn), 未完了相3人称(pətx-*∅ m.*; pətx-*∅ f.*; pətx-*ij pl.*), 3人称単数を目的語とする完了相(ptix-*∅ m.*; ptix-*e f.*)などに残る。ここで複数-īn>-ijに注目すれば、CSに起こらない-nの脱落をBAに求めなくてはならない。*cst. st.*の残滓は、bar '～の息子' (*det. bēra*, cf. U brunə=縮小形)が年齢表現に、bne '～の息子たち'(<bēnay, *det. bēnayyā*)が共同体構成員表現に、məri '～の持ち主'(<mārē, *det. mārā*)が属性表現に用いられる。生産的ではあるが性・数変化を欠くこれらは、複合語構成要素か接頭語にすぎない: bəxcəni (*pl*庭)məri ijləni (*pl*木) '木々のある庭'。brə- '～の娘'(brə-*ijda* '手'>'手袋')や bi(t) '～の家'(bi-nijsəni '4月, *pl*'>'春')などは生産的ですらなく、語の一部である。

尚、複数の一般化 ē>iに関しては、CS ay (*cst.*)/ē (*det.*)よりも両者同一形式のBA ēやCM ia[i:]を想定する方がより合理的であるし、単数女性名詞が複数で**-ətə*<**-ātā*でなく*-əti*<**-ātē*を持つことも、*-ātā*~*ātē*を持つBAを指向している。

付言すれば、前述 brə-は明らかに*bēraṭに遡るがCSはbaṭ (<*batt<*bant<bin '息子'+女性語尾t)のみを持つ。brətə '娘'もBA・CMのbēraṭtā (<*bērātā<*bin-a-tā)に他ならないから、CS bar

tā(bin>ban>bar+tāの二次的構成)と何の関係もない。こうした基礎語彙でもCSと決定的に異なるのは、MEAの来源に関して大きな意味を持つものとなる。ちなみにMCAはbartōであるから全体的なMCAのCSへの近さを証明している。類似のMWA berčaは母音不明の西アラム語G A・C P Aのbrt'の音形を決定するかに見えるが、サマリア・アラム語の伝統的発音bēratta~birta(マツーフによる)は我々を困惑させる。

2.3.4. 形容詞 名詞と同様に位相と複数での性の区別は失われた。従って女性複数は現れず, *m. -ə*, *f. -tə*, *pl. -i*。限定的用法では名詞の後に置かれるが, *spaj* ‘良い’, *raba* ‘多くの’, *zodə* ‘もっと多くの’ と不定形容詞類は前置される: *xəkmə* ‘幾つかの’, *xəccə* ‘少しの’, *pyllan* ‘ある’。叙述的用法の時, 主語—述語—コプラ(肯定), 主語—コプラ—述語(否定)の語順となる。

2.4. 動詞体系

アスペクト・時制体系とその形式を, 3語根の不連続形態素 $\sqrt{p-t-x}$ ‘開ける’を用いて示すと次のとおり。相互の区別のためそれぞれに番号を付し, 正確な日本語訳が不可能であるから意味を英語で示す。これらの形式はすべて, 3人称男性単数である。

時 制 アスペクト 活用	単純時制 Simple Tense		複合時制 Compound Tense (習慣様態/結果様態)	
	現 在	過 去	現 在	過 去
直接活用	未完了相 Impf. $\left\{ \begin{array}{l} 1. ki \\ 2. bit \\ 3. \phi \\ 4. qəm \end{array} \right\} - pətix + A$	$\left\{ \begin{array}{l} 5. ki \\ 6. bit \\ 7. \phi \end{array} \right\} - pətix + A \pm və$	$\left\{ \begin{array}{l} 14. ki \\ 15. bit \\ 16. \phi \end{array} \right\} - həvi + A - \left\{ \begin{array}{l} \alpha \\ \beta \end{array} \right\}$	$\left\{ \begin{array}{l} 17. ki \\ 18. bit \\ 19. \phi \end{array} \right\} - həvi + A \pm və - \left\{ \begin{array}{l} \alpha \\ \beta \end{array} \right\}$
完了相 Perf.	8. ptix + li(C)	9. ptix $\pm və$ $\pm li(C)$	20. vi + li(C) - $\left\{ \begin{array}{l} \alpha \\ \beta \end{array} \right\}$	—————
間接活用	結果相 Res.	10. ptijxə $\pm ijli$	11. ptijxə $\pm ijvə$	21. vijjə $\pm ijli - \left\{ \begin{array}{l} \alpha \\ \beta \end{array} \right\}$
	進行相 Prog.	12. biptəxə $\pm ijli$	13. biptəxə $\pm ijvə$	22. vijjə $\pm ijvə - \left\{ \begin{array}{l} \alpha \\ \beta \end{array} \right\}$
	命令法 Impt.	25. ptux		23. bivəjə $\pm ijli - \left\{ \begin{array}{l} \alpha \\ \beta \end{array} \right\}$
				24. bivəjə $\pm ijvə - \left\{ \begin{array}{l} \alpha \\ \beta \end{array} \right\}$

〈略号〉 + : 正書法で一語と表記

— : 二語として表記される境界

± : 新アルファベット正書法で一語と表記されるがシリア文字で二語と表記される境界

α : bi - ptəxə

β : ptijxə

A・C : 直接活用語尾の種類

1. he opens 2. he will open 4. he (has) opened [it] 5. he opened 6. he would open
8. he (has) opened 9. he had opened 10. he has opened 11. he had opened 12. he is opening
13. he was opening 14 α . he usually opens 15 α . he will be usually opening
17 α . he usually opened 18 α . he would be usually opening 20 α . he began to open/he kept opening
21 α . he has been opening 22 α . he had been opening 23 α . he is usually opening

24 α . he was usually opening 25. open ! 14 β . he has usually opened 15 β . he will have usually opened 17 β . he had usually opened 18 β . he would have usually opened 20 β .

*he has had opened 21 β . *he has been having opened 22 β . *he had been having opened 23 β . *he is usually having opened 24 β . *he was usually having opened

2.4.1. **アスペクト・時制の移行** セム語のアスペクトはCS (完了pētāx-φ 未完了ne-ḡtax)において、能動分詞(active participle, 以下*a. p.*, pātēx)による表現が加わり時相表現の微妙な移行が始まっていた。*a. p.* は状態・継続を表す点で未完了形と交替する(未完了形は接続法に限定)のみでなく、完了/未完了を一つ前の時に移す機能を持つに到った $\sqrt{h-w-y}$ ‘to be’ の完了形hāwā を伴うことにより、完了形にも接近した。この結果本来非定形の分詞が人称代名詞と結合し、定形化した : pātēx + ‘att ‘you’ > pātēx-att ‘君は開く’, cf. pētāx-t ‘君は開いた’ 完了形 ; te-ḡtax ‘君は開く(だろう)’ 未完了形。

Uではこうした変化が、アスペクト対立を基本とし、və (<hāwā)の有無が時制(現在・未来/過去)を担うという形で完成した。まず定形化した*a. p.* は古い未完了形を完全に駆逐して未完了相を生んだ。

pātēx (*a. p. abs. st.*) + φ ‘he’ > pātēx-φ ‘he (will) open’

⇒ pētix-φ 未完了相 Imperfective (Impf.)

古い完了形は、公用アラム語(前5世紀)でペルシア語の影響から生まれた受動分詞(passive participle, 以下*p.p.*)の次の構文(完了相)や能動的意味を持つ*p.p.*の発展(結果相)により交替されて消失した。

pētix (*p.p. abs. st.*) + l- ‘by’ + eh ‘him’ : It is opened by him > he (has) opened (it)

⇒ ptix-li 完了相 Perfective (Perf.)

pētixā (*p. p. det. st.*) + ‘it-leh ‘he has /is’ : he has /is what is opened > he has opened /it is open

⇒ ptijxə-ijli 結果相 Resultative (Res.)

更に、未完了相に移行してしまった*a.p.*のあとに、行為名詞(nomen actionis, 以下*n. ac.*)に由来する不定詞 Infinitive (inf.) による進行相が生まれた。

bi ‘in /at’ + ptəxə (*inf.*) + ijli ‘he is’ : he is in the state of opening > he is opening

⇒ biptəxə-ijli 進行相 Progressive (Prog.)

2.4.2. **時相表示詞 Tense Indicator** 動詞語幹がアスペクトを表す一方で、未完了相の意味機能を特定化するため、次の時相表示詞が用いられる。vəはすべてのアスペクトの時制を決定する点で性格が少し異なるが、この中に含める。

現在 : ki < qā(‘em), $\sqrt{q-w-m}$ ‘立つ’ *a. p.* (BA qā, kā ; CM qa~qi~q ; CS kay ‘さて, かくして’ でない)

未来 : bit < bid < bē‘ē ($\sqrt{b-‘-y}$ ‘求める’ *p. p.*) + 関係詞d

過去 : qəṁ < qēdām ‘以前に’

qəm は後述の条件下にのみ用いられるので、当然vəと共起しない。

2.4.3. 複合時制 Compound Tense MEA のみが持つ顕著な特徴は、助動詞 $\sqrt{h-v-y}$ ‘to be’ の単純時制 Simple Tense と動詞非定形 α (bi + 不定詞)・ β (p, p., det. st.) の組み合わせにより複合時制を生み出したことである。 α により動詞の行為的側面 dynamic が、 β により動詞の状態的側面 static が表現される。ポロツキーは、前者を習慣様態 Habitual、後者を結果様態 Resultant と呼称し、この区別をアスペクトとは別に行為様態 Aktionsart とする。

ポロツキーは安易な複合時制の設定に注意を促しているが、複合時制の結果多数となった動詞の諸形式は、すべて同じ頻度で現れるわけではない。実際彼は $22\alpha\beta$ ・ $24\alpha\beta$ を省いているし、 21β ・ 23β は 1 例のみ、 23α は例を持たないと言っている。更にマクリーンも $15\alpha\beta$ ・ 16β ・ 18β しか扱わず、マログーロフに至っては $20\alpha\beta$ ・ $24\alpha\beta$ に触れない。しかし例の多寡は初期に複合時制が十分認識されていなかったことに起因すると考えられるし、微妙な意味表出の必要性はおのずと頻度も低い。

一方助動詞と α ・ β による複合時制は、上記のみでなく受身表現にも見られる。これらを図式化する。

種類 \ 構造		助動詞 (単純時制)	非定形
行為様態	習慣様態	$\sqrt{h-v-y}$ ‘to be’	bi-ptəxə (α)
	結果様態	$\sqrt{h-v-y}$	ptijxə (β)
受動態	受動態	$\sqrt{p-j-š}$ ‘to remain’	ptijxə (β)
	可能受動態	$\sqrt{’-t-y}$ ‘to come’	li-ptəxə (α')

複合時制の種類と構造

以上からすべての動詞は、未完了相・完了相の語幹、命令形、 α ・ β の 5 形式、及び助動詞の 4 形式(命令形を除く)が判明すれば、あらゆる活用形が得られることになる。助動詞は本稿で扱わない不規則動詞であるから、その 4 形式を示しておく。

	Impf.	Perf.	β	α
$\sqrt{h-v-y}$	həvi	vi	vijə	(bi) vəjə
$\sqrt{p-j-š}$	pəjiš	piš	pijə	(bi) pjəšə
$\sqrt{’-t-y}$	əti	ti	tijə	(bi) təjə

助動詞主要 4 形式

2.4.4. 動詞形式の相互関係 多数の表現形式の幾つかは当然意味が重なりあって文体的変異体としての位置しか持たないし、衝突しそうな形式の一方は特殊な意味を発達させている (20α など)。ちなみに上掲の英訳は基本的なものであり、二次的用法は割愛してある。又微妙なニュアンスの訳出必要性から非文法的英語になった場合星印(*)を添えてある。その中でも未完了相 4. qəm pətix は特徴的である。本来完了相は 8. ptix-li ‘he has opened it’ により表現されるが、目的語の接中に際して

未完了相の活用語尾(A)と同一のものをを用いるなど非常に複雑である(後述)。このため4.は8.に
対する文法的変異体として機能し、常に人称目的語Cを伴う他動詞であるという条件が存在する：
qəm pətix-li 'he (has) opened it'.

他方2.4.1.で言及した結果相の起源に注目する。*p. p.*は述語の形式abs.st.で現れる完了相ptixと異
なり*det. st. ptijxə*であるから、名詞の性格‘what is opened’を持つ。コプラは発生的に見て、「コプ
ラB：通時的検討」で見たように、二重の意味を持っていた：‘it l-eh ‘there is to him>he is/he has’>
ijli。結果相はこのうち‘he has’の意味から生じたものに由来する：he has what is opened>he has
opened。他方単にコプラの意味‘he/it is’の場合それは「AはBである」の存在文となる：it is what
is opened>it is open. 同時に複合時制の助動詞 $\sqrt{h-v-y}$ は本来‘to be’であるから $\beta=p. p. ptijxə$ によ
る結果様態 Resultant $14\beta-24\beta$ も能動的複合時制でなく、 $\sqrt{h-v-y}$ による単純時制の存在文になりうる。
この両者の区別は、ひとえにコプラ・ $\sqrt{h-v-y}$ の性格と、*p. p.*を受動的に把えるか、(後期アラム語で広
く認められるように cf. ネルデケ, 1898, §280) 能動的に把えるかによって決まるものである。受
動的な存在文としての訳を掲げるので、対応する10・11・複合時制 ($14\beta-24\beta$)と比較されたい。

10'. it is open 11'. it was open 14β'. it is usually open 15β'. it will be open 17β'. it
used to be open 18β'. it would be open 20β'. it has been open 21β'. it has been open
22β'. it had been open 23β'. it is becoming open 24β'. it was becoming open

2.4.5. 法 **Mood** 直接法 Indicative と命令法 Imperative (Impt.) は前掲の諸形式により表現され
る。意志・希望等の従属節中に用いられる接続法 Subjunctive は未完了相を用い、時相表示詞 ϕ 形態
素をとる。対応する形式と訳は次のとおり。

3. that he open 7. that he(have)opened 16α. that he usually open 19α. that he(have)
usually opened 16β. that he have usually opened 19β. *that he had usually opened
16β'. that it be open 19β'. that it have been open

特に3.は1・3人称に対する間接命令となり、2人称に対しては丁寧な命令となる。

条件文の帰結節に用いられる条件法 Conditional を設定する人もいるが、その形式 (6・18α・18β)
は直接法と同じであるから形態上の区別はなく、それを認める必要はない。統語論の問題として扱
われれば良い。但し条件文の条件節 (protasis) と帰結節 (apodosis) によく用いられる形式は定
まっているようである。対応する英語の仮定法構文名で示すと次のとおり。

	protasis	apodosis
a. 仮定法現在	3(8)	2
b. 仮定法現在完了	16β	2
c. 仮定法過去	7	6, 18α
d. 仮定法過去完了	19β	18β

条件文の構成

2.4.6. 受動態 **Pssive** アラム語の受動態は、動詞の各派生型(後述)に対して‘et-を接頭させる再帰

型reflexive stemにより表現された。Uでは、助動詞 $\sqrt{p-j-s} + \beta$ (ptijxə)の構文と、gənə‘魂’(<クルド語ハカリ方言Hakari gān)に基づく再帰代名詞(gān-u‘彼自身’)による表現によってこれらは交替された。又、新しく助動詞 $\sqrt{t-y} + \alpha'$ (li-ptəxə)により可能受動態potential passive‘～されることができる’も生まれた。これは否定文に多く困難・不可能を意味する。

但し通時的に見て再帰型の残滓を見出すこともできる： $\sqrt{t-r}$ ‘(気絶後)正気に戻る’<'ettē'ir, $\sqrt{t-y-r}$ 。またCS再帰型行為者名詞(nomen agentis, 以下 n. ag.=分詞+ān(ā))に対応する形容詞がUの書き言葉の中に散見される(マログーロフ, §82 šimmə d xəşuṣə‘受動名詞’, 仏訳le nom d'objetは誤訳): mitqəblənə<metqabbēlānā‘acceptable’。

2.4.7. 活用の種類 A: 直接活用 Direct Conjugation——動詞語幹に人称代名詞接尾形を接尾して、人称・性・数の活用を示すもの。

1) 未完了相=時相表示詞+動詞語幹(pətiḫ) + 接尾形A + (və) + (目的語: 接尾形C)

2) 完了相=動詞語幹(ptiḫ) + (目的語: 接尾形A') + (və) + 接尾形C

3) 命令法=動詞語幹(ptux) + 語尾(sg. -φ, pl. -un) + (目的語: 接尾形C)

B: 間接活用 Indirect Conjugation——意味は動詞の非定形が示し、活用はコブラ・助動詞により間接的に示されるもの。

4) 結果相=β(ptijxə) + (目的語: 接尾形B) + コブラ(ijli/ijvə)

5) 進行相=α(bi+ptəxə) + (目的語: 接尾形B) + コブラ(ijli/ijvə)

6) 複合時制=それぞれの助動詞が活用を担う。未完了相・完了相では助動詞にA・Cが接尾され、助動詞自身は直接活用・単純時制である。結果相・進行相では助動詞そのものが間接活用となるので、いわば二重間接活用である(ポロツキー, ‘temps surcomposés’)。習慣様態・結果様態の目的語は接尾形Bで示される。他の二つの受動態は、当然目的語をとらない。

人称代名詞接尾形A・A'を接尾する時の形態音韻的变化は、前述の代名詞の項を見よ。接尾形Bは名詞としての非定形である分詞と不定詞に接尾されるので、それらの語尾-əは脱落する。進行相αのbi-は不定詞の語頭が唇音(m, p, b, v)の時通常脱落する。

2.4.8. 助動詞・コブラ 受動態も含めた四つの複合時制で用いられる助動詞は、他の動詞非定形の活用を示すので自らは単純時制しか持たない。独立した動詞としては複合時制も持つ。コブラも結果相・進行相の活用を示す(間接活用)ので助動詞として機能している。よってこの二つも複合時制に含める立場もありうるが、助動詞が単独でも意味を持ち完全な活用をするのに対して、コブラは文法関係を示すのみで現在/過去の二時制しか持たない(§2.2.6と§2.4.3参照)。

2.4.9. 動詞の非定形Infinite Form 直接活用の動詞形を定形finite formとすれば、間接活用の受動分詞と不定詞はそれ自身が活用することなく非定形である。こうした非定形には次のものがある。

(1)(新)能動分詞 a. p. : 古い a. p. (pātex = pətiḫ) は未完了相語幹となったので、それに-ənəを接尾したpətxənə(one who opens; opening)が新しい能動分詞となる。目的語を取らず名詞的性格

が強いので一般に(新)行為者名詞 *n. ag.* と呼ばれる。CS で派生型にのみ接尾された-ān(ā) が MEA で基本型にまで一般化したことが注目される。(2) 受動分詞 *p. p.* : 受身の分詞は古いのがそのまま用いられる (*peṭixā = ptijxə*)。(3) (新)不定詞 *inf.* : 後期アラム語の形式 *me-ptax* は消失し、多くの動詞にみられた行為者名詞 *n. ac. peṭixā* が U の不定詞 *ptəxə* となった。進行相・複合時制習慣様態で常に *bi-* を伴うためそれを *inf.* の一部とみなしてもよいが、可能受動態や $\sqrt{s-r-y}$ II₁ ‘始める’等には *li-* を伴う。(4) 動名詞 *gerund* : しかし *inf.* は活用体系の中に組み込まれたので行為・動作そのものを示す動名詞が *inf. + tə* (女性語尾) により生まれた: *ptəx-tə* ‘開けること’ < *ptəxə + tə*。一般には(新)行為者名詞 *n. ac.* と呼ばれる。これは前置詞 *-il-* (2.2.4. 参照) により目的語を示すことができる: *ṣqəl-tə il-e minn-oxun* ‘それらを君たちより取ること’。

2.4.10. 派生型 Stem 今まで扱ったのは基本型 I (Peal) であるが、後期アラム語強張型 Pael に対応する II₁ と使役型 Aphel に対応する II₂, 及び4子音動詞が存在する。古いアラム語では同一語根が意味の変化を伴って各派生型にも用いられたが、現代アラム語では生産的でなく痕跡的に残るのみである: *peṭix* I ‘開ける’; *məptix* II₂ ‘開けさせる’。

種類	後期アラム語との対応関係	定形 Finite			非定形 Infinite				意味
		Impf.	Impt.	Perf.	p.p.(β)	a.p.(n.ag.)	inf(α)	gerund(n.ac.)	
I	Peal	<i>peṭix</i>	<i>ptux</i>	<i>ptix</i>	<i>ptijxə</i>	<i>peṭxənə</i>	(bi) <i>ptəxə</i>	<i>ptəxtə</i>	開ける
II ₁	Pael	<i>pəqid</i>	<i>pəqid</i>	<i>puqid</i>	<i>puqdə</i>	<i>pəqdənə</i>	<i>pəqudi</i>	<i>pəqədtə</i>	命令する
II ₂	Aphel	<i>məptix</i>	<i>məptix</i>	<i>muptix</i>	<i>muptixə</i>	<i>məptixənə</i>	<i>məptuxi</i>	<i>məptəxtə</i>	開けさせる
	4子音	<i>hənzim</i>	<i>hənzim</i>	<i>humzim</i>	<i>humzimmə</i>	<i>hənzimənə</i>	<i>hənzumi</i>	<i>hənzəmtə</i>	話す

Uの動詞派生型

(1) 後期アラム語派生型との対応関係: 派生型 II₁・II₂ は母音不連続形態素が同一である点で基本型 I と対立しており、両者を共時的に独立したグループとする根拠は無い。これは古いアラム語 Pael の分詞・不定詞の接頭辞 *mē-* が脱落 (*mēpaqqed* > * *paqqed*, 但しシリア文字正書法では残るので要注意) するのに対して, Aphel は接頭辞 *m-* を保存 (*maṭtex* > *məptix*) し語幹の一部として扱うことにより, 子音・母音の不連続形態素が一致した結果である。II₁ の第2子音の重子音性が失われた (* *paqqed* > *pəqid*) のが, これに先行するの否かは目下不明。4子音動詞も *mē-* の消失により同じパラダイムに入った(4子音動詞は既に CS でも *n. ag.* を作る時, *a. p.* の *mē-* を脱落させることがあった)。II₁ で第2子音の重子音性が失われた結果, 未完了相の *palbṭ* I ‘出る’/ *palbṭ* II₁ ‘取出す, 追出す’ (< *mēpallet*) の区別は中和する。但しその跡が確認できるものもある: *zəvin* I < *zāḅen* ‘買う’; *zəbin* II₁ < *məzabben* ‘売る’。

(2) 未完了相語幹・命令形: 前者は古い *a. p.* による。II₁ 命令形は古い形式のまま(むしろ CS でも *mē-* を落とせば命令形) だから, II₂ Aphel のみ新パラダイムに合わせて *m-* を残す。4子音動詞は

未完了相＝命令形・*p. p.* で母音で始まる接尾辞がつくと、第4子音が重子音となる。

(3) 完了相語幹・受動分詞：基本型 I では古い *p. p.* より完了相語幹 (*abs. st.*) と受動分詞 (*det. st.*) が作られるが、 $\Pi_1 \cdot \Pi_2$ はそうでない：CS *p. p.*, *Pael mēpaqqad*, *Aphel maṭtax*。ネルデケ(1868, §101) も言うように、これらは受身の母音 -u-a- を持つ非常に古いセム語の形式であり、CS には見られない：**mēpuqqad* > **puqqad* > *puqid*; **muṭtax* > *muptix*。アラム語では聖書アラム語完了形受身 (*Pual*・*Hophal*——ヘブライ語も同様)、オンケロス・タルグーム (*Pael*) と BA (*Pael*・*Aphel*) の受身分詞の異形態 *mēquṭṭal*・*muṭṭal* に見られるのみである。MEA に突然それが現れることは、かなり衝撃的である。

(4) 能動分詞：後期アラム語の *n. ag.* (*a. p.* + -ān(ā)) に由来する。これは派生型の形式であり基本型 I の *n. ag.* は *pātōxā* であったのに、前者の形式により交替された。

(5) 不定詞：基本型 I は 2.4.9. を見よ。派生型でも CS の形式 *Pael mēqaṭṭālū*, *Aphel maqṭālū* は用いられない。むしろ MEA の形式 -a-u-i は BA (及びその影響下に誤って伝承された GA の一部) *qaṭṭō/ūlē*, *'aqṭō/ūlē* や CM *gaṭulia*, *agṭulia* (-ia = [i:]) に対応するものであって、MEA の起源に関してきわめて示唆的である。尚、派生型不定詞は、継続相と習慣様態で基本型 I のように bi- をとることはない。

(6) 動名詞：機能において CS の *n. ac.* に相当するが、すべて女性語尾 -tā を持つ点が共通する。しかし形態的には、基本型 I (2.4.9. を見よ) を除き CS の *n. ac.* にもとめられない：*Pael quṭṭālā*; *Aphel inf.* で代用；4子音動詞 *quṭlālā*。上述のように Π_1 の語頭の *mē-* は脱落しているので、 Π_1 *pəqəd-tā* は **paqqād-tā*, 即ち **mēqaṭṭāl-tā* に遡る。ところが奇妙なことにこの形は後期東アラム語に見当たらず、後期西アラム語 GA の不定詞にそのまま対応する。換言すれば GA では語尾 -ā を女性の *abs. st.* と解釈し *det. st.* で *meqaṭṭāl-tā* になる。従って MEA $\Pi_1 \cdot \Pi_2$ の動名詞は GA の不定詞 *det. st.* にのみ対応するのである (*Aphel* は *maqṭāl-tā*)。ちなみに、オンケロスでは *m(ē)-* は既に脱落していた。

2.4.11. 術語対照表 MEA 研究は発見後の長時間の経過にもかかわらず、研究の歴史は他の主要セム語・後期アラム語に比べればまだ若い。この結果文法の枠組み、特に動詞組織に関して共通の認識が無く、U の共時的記述文法すらないことがそれを象徴している。そこで主要研究者の術語対象表を次に掲げる。尚、ネルデケは主に後期アラム語の枠組みなので示さない。

(1) アスペクト・時制体系：数字で示す本稿の形式に対応するツェレテリ(左)とマククリーン(右)の名称。

group I	1. general present/habitual present	5. general imperfect/habitual imperfect
	2. future	6. conditional
	3. subjunctive I/first present	7. subjunctive II/—————
	4. preterite I/preterite (rare)	
group II	8. preterite II/preterite	9. pluperfect II/second preterite
	10. perfect/perfect	11. pluperfect I/pluperfect
group III	12. concrete present/second present	13. concrete imperfect/imperfect

マログーロフは、各形式に対する名称を与えないが、次表のようになろう。アスペクトは動詞語幹固有のものとして次のように述べる： first form (しばしば起こる), second form (しばしば起きまだ終らず結果はわからない), third form (完了しており結果が続いている), fourth form (完了しており結果は現れてしまっている), *həvi* の諸形式(しばしば/いつも起こる)。また20-24を扱わない。

法 時 制 ア ス ペ ク ト 本 橋		indicative						subjunctive		conditional
		φ			həvi					
		present	past	future	present	past	future	present	past	
Impf.	first form	1	5	2	——	——	——	3	7	6
inf.	second form	12	13	——	14 _α	17 _α	15 _α	16 _α	19 _α	18 _α
p.p.	third form	10	11	——	14 _β	17 _β	15 _β	16 _β	19 _β	18 _β
Perf.	fourth form	——	8	——	——	——	——	——	——	9
			4							

(2) 時制の枠組み： マログーロフは呼称をつけない。ツェレテリは series II を反復・開始・習慣等のアスペクトであるとする。

本橋	Tsereteli	Maclean	Polotsky
単純 simple	series I		simple, synchronous compound
複合 compound	series II	subsidiary tense	general compound, temps surcomposés

(3) 派生型の呼称：

後期アラム語	本橋	Tsereteli	Maclean	Marogulov
Peal	stem I	first conjugation	first conjugation	theme I
Pael	stem II ₁	second conjugation: intensive	second conjugation: 1st/2nd division	theme II
Aphel	stem II ₂	second conjugation: causative	second conjugation: 3rd division	theme III